

福 井 県 医 師 会

だまり

第552号 平成19年(2007)6月



表紙写真説明：雨とネオンとからくり時計

見てお分かりのように、場所は福井西武横の「アップル・ロード」で、雨の夜の光景です。

デジカメで撮った写真を基本にしていますが、実際とはかなり違います。まず渡り廊下がありません、それに、通行人はいろいろなモデルを参考にしました。右下の父子は「父の日」に皇太子殿下が参観に愛子様を連れていかれた時の新聞の写真を、その後ろに我が古女房が続いています。

福井市 村田 秀秋

新型インフルエンザへの備え

福井県奥越健康福祉センター医幹 武 藤 眞



足かけ18年にわたりお世話になった福井赤十字病院から県行政（保健所）に転じてはや6年が過ぎました。その間丹南、若狭、二州、奥越と職場が変わり、その都度医師会の先生方には大変にお世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

現在、少子高齢化社会における制度維持を目的とした、近年にない規模の「医療制度改革」が進行中ですが、美辞麗句の影に見え隠れする本音の部分をしっかり見すえて、健康政策の後退にならないようにしてなくてはならないと強く感じております。「医療制度改革」に関しては、本欄で既に多くの先生が述べておられますので、今回は新型インフルエンザへの対応について述べたいと思います。

現在、新型インフルエンザとして変異、出現することが一番心配されているH5N1タイプの鳥インフルエンザは、依然として鳥類の間で流行が続いています。ヒトへの感染も世界では、2003年以降306名（うち死亡182名）確認されており、本年に入ってから既に43名（うち27名死亡）が確認されています（5月16日現在）。患者登録が十分でない国や地域も多いことから、実数ははるかに多いことが想像できます。

わが国では幸いヒトへの感染例は公式には確認されていませんが、鳥インフルエンザについては、本年1月に3年ぶりに宮崎、岡山でH5N1タイプが発生し、我々行政側も改めて発生に備えた体制整備をいたしました。鳥インフルエンザと新型（人型）インフルエンザとの違いはアミノ酸配列数個の違いでしかないと言われており、新型インフルエンザは、長さのわからない導火線に火がついた状態の爆弾にも譬えられています。

万一新型インフルエンザが発生した際に、

ワクチンや治療の効果が不十分であったり、その時間的、量的な不足があったりすれば、拡大を阻止することはできず、そのウイルスの感染力、毒性（致命率）にもよりますが、極めて深刻な人的、社会的影響が生じることは間違いありません。極めて甚大な被害をもたらした1918年のスペインかぜによる致死率が、当時の医療レベルで2%であったことを考えると、現在のH5N1ウイルスのヒトへの致死率の高さには、暗然とならざるを得ません。

既にご承知の方も多いかと思いますが、国は本年1月にフェーズ4（人一人感染の成立）以降の「新型インフルエンザ対策ガイドライン」案を示し、パブリックコメント等を経て、3月26日に正式に公表しています。（厚労省ホームページで見ることができます）検査から医療関係も含み埋火葬まで13のガイドラインからなる全体で244ページにわたる大きなものです。

記載された対応はあくまで現行制度の枠内での対策ですので、実際に発生したときこんなことできるのだろうか、といった項目が多いことも事実です。しかし現実問題として発生時の対応を少しでも準備しておく必要がありますし、その材料として皆様には是非ご一読いただければと思います。

新型インフルエンザに関しては、発生時の社会的影響の大きさに比して、医療関係者以外の危機意識は小さいのが現状です。その恐ろしさと社会的影響とを実感を持って推定することができる医療関係者自らが声を上げていかないと、社会全体の意識は変わらず、準備も出来ないままになりかねません。是非皆様には関係各方面での啓蒙を進めていただきたいと願っております。